

れ以外の群落と比較していずれの季節も体感温度が高かった。したがって、観察されたサルの泊まり場選択は、沢を積極的に利用することにより夜間の体温維持コストを下げる機能があると推測された。

1-3 管理を目的とした三重県下のニホンザル遺伝子モニタリング

赤地重宏（三重県科学技術振興センター）

対応者：川本芳

これまでのミトコンドリア遺伝子分析で、三重県下には2種類のハプロタイプを確認している。両タイプは異所的に分布し、この2タイプが混在する地域や群れは今のところ確認できていない。両タイプの分布は大山田村付近で南北に分かれる。県外地域と比較した結果、県南部には紀伊半島に特異的な一群のハプロタイプに属するタイプが存在することが明らかになり、JN33タイプと命名した。このタイプは奈良県、和歌山県でも確認されている。紀伊半島に特異なタイプはこれ以外に5タイプあり、滋賀県南部地域から奈良県、和歌山県そして三重県南部地域に分布する。他県ではこのうちの複数タイプが分布するが、三重県では1タイプしかない点に特徴がある。一方、県北部地域に分布するタイプは分子系統的に南部のJN33タイプとは大きく分化しておりJN30タイプと命名した。このタイプは石川県、岐阜県、滋賀県にも分布する。三重県のニホンザルではミトコンドリア遺伝子のタイプ数は少ないが、タイプ間の塩基配列にはちがいが大きいといえる。これら二つのタイプを利用したモニタリングにより、県内の南北地域間のオス拡散が調査できる目処がたった。

1-4 房総半島におけるニホンザルとアカゲザルの交雑に関する研究

萩原光（房総の野生生物調査会）、相澤敬吾（館山高等学校）

対応者：川本芳

千葉県で確認されているアカゲザルを含む群れの生息地はニホンザル生息域から約15kmしか離れていない。今年度5月、初めて千倉町に入り行動域が北東方向へ拡大したのを確認した。このことは従来のニホンザルにとって交雑の脅威となっている。平成15年度にはアカゲザル生息域内で、平成16年度にはニホンザルの生息域内でそれぞれ交雑個体が確認されている。本研究では12月にアカゲザル生息域で採集された糞サンプル（48試料）についてミトコンドリアDNAの遺

伝子配列解析を実施した。分析の結果、41試料がアカゲザルタイプ、1試料がニホンザルタイプと判断できた（6試料は判定不能）。性別分析ではアカゲザルタイプのうち17試料がメス、7試料がオスと判断できた（判定不能6試料）。また、ニホンザルタイプの1試料については性別の判定はできなかったものの、糞サイズから若齢と判断され、アカゲザルを含む群れで出生したものと推測された。今後、アカゲザル生息地のみならず、ニホンザル生息域においても交雑の進行状況をモニターしていく必要があると考える。

1-5 保護管理にむけた中部山岳地域のニホンザルの遺伝的多様性解析

森光由樹（野生動物保護管理事務所）

対応者：川本芳

報告者はこれまで、中部山岳地方、特に長野県内4つの地域個体群に生息している個体から試料を採取しミトコンドリアDNAのDループ可変域、412塩基対の配列を解読し7つのハプロタイプをあきらかにした。今年度は、情報の少なかった上信越地域個体群の東側地域（群馬県、新潟県）および日光地域個体群西側地域（群馬県、栃木県）に生息している22頭のメスおよびコドモから試料を採取し、同法にて塩基配列の解読を行った。その結果、日光地域個体群では、東北の1型、日光・今市の4型、栃木県佐野市の5型が検出された。また、上信越地域個体群では東北系統1型、4型、5型に加えて東京都奥多摩・埼玉県秩父の9型、奥多摩・秩父に近い55、56型、軽井沢の16型、北アルプスの17型が検出された。特に群馬県北部、谷川岳周辺では隣接している群れの遺伝子タイプがそれぞれ異なり、東北系統、奥多摩秩父系統、北アルプス系統が混在していた。これまでの結果からニホンザルが西から東へと分布を広げる際、群馬県北部、水上町周辺を起点に関東・中部から東北地方、新潟北部へ分布を広げた可能性が考えられた。

1-6 ウマヤザル信仰に伴う頭蓋骨の調査による口承と生息分布域の相関関係

中村民彦

対応者：川本芳

ウマヤザル信仰とは厩に猿の頭蓋骨や手を祀り牛馬の無病息災や家内安産、五穀豊饒を祈願したものである。当信仰は東北全域に流布していたが、近代から現代における残留形態や口碑の全容は十分に解明されていない。更にこれに関係するニホンザルの捕獲や捕